

とぎやんして  
 貧困から脱却するか。



食の  
 仕事人 33

(株)ナチュラルコーヒー 会長  
 NPO法人  
 日本フェアトレード委員会  
 理事長  
**清田和之さん**

世界の生産地と消費地を直接結ぶ産直こそ、  
 弱い立場の生産者を救う  
 フェアトレードの近道。  
 そんな思いから、スリランカで  
 コーヒーの有機無農薬栽培振興に  
 力を尽くす男がいる。  
 日本フェアトレード委員会理事長の  
 清田和之さんを熊本市鹿子木町に訪ねた。

取材・文／西原浩司 撮影／塩川直也  
 写真提供／日本フェアトレード委員会



特集 台所からダイエット

平成20年6月1日発行 第74巻第6号 掲載21年6月15日 第3種郵便物認可 55頁 1,000円

# 栄養と料理

現代を  
 健康に  
 生きる

2008  
 JUNE

6

特集  
 自分も地球もスリムに

## 台所から ダイエット

枝元なほみのエコクッキング  
 西川勢津子の台所整理6つのヒント  
 4人の達人が公開冷蔵庫マネジメント法  
 エコでヘルシーむだのない買い物術

.....  
 たんぱく質制限の  
 ある人の  
 食事ガイド  
 梅干しレンビ  
 子どもが喜ぶ  
 魚のおかず







「140年の時を超えて復活。  
幻のコーヒーの新しい物語がここから始まる」

けた伝説を持つ。以後、経営コンサルタントとして順風満帆なビジネス活動をしてきたが、一転してコーヒーの世界に入ることに。

「最初はただ単に豆の仕入れ販売だけでしたが、自分で焙煎を手がけるようになると、今度はどうしても生産地を自分の目で見て買いつけがしたくなりました。いつてみれば商社を介さない、地球をまたぐ産直です」

そして、イヴァン・フランク・カイシエタという人の農園が有機JAS（日本農林規格）認証をブラジルで初めて取得したことを聞くと、すぐに地球の反対側へ飛んだ。02年のことである。

「イヴァンさんと出会って学んだことは、コーヒー豆の大産地であるブラジルで、自分のところのコーヒーは飲まないというほど大量の農薬が使用されているという現実でした。でも94年から有機栽培に切りかえたというイヴァン農園は、微生物が自然に繁殖し、土

が肥えてコーヒーの樹に生命力がみなぎっていたのです」

2人はすぐに意気投合し、顔の見える生産者のこの年としてイヴァンさんの豆は、この年以後、ずっとナチュラルコーヒーの看板商品となっている。

### フェアトレードと 出会う

イヴァンさんに教えられた重要なことがもう一つあった。ポツソフンドという貧困にあえぐ小規模コーヒー生産地と、その生産者を救うためのフェアトレードという考え方だ。フェアトレードとは、不当に安く買い叩かれていた生産物を、生産者の生活が保障される公正な価格で生産地から買う貿易のことで、生産地側の経済と雇用を支えることを目的としている。

「現地語で『井戸の底』を意味するポツソフンドは、サッカークワールドカップ優勝で沸き立つブラジルのほかの土地とは裏腹に、

熊本城築城御年でにぎわいを見せる、熊本市。薩長による維新の波の後塵を拝し、西南戦争で敗れた熊本藩の獅子たちは、その後、教育・学問の道に力を注ぎ、名門済々館高等学校より数々の才能を輩出し続けている。1908年に日本初のブラジル移民船「笠戸丸」の団長を務め、コーヒーを通じた日本とブラジルのかけ橋となった上塚周平もその一人であり、そのちよと10年後、スリランカのコーヒー栽培復興による農村支援に奔走する清田和之さん（62歳）もまたその流れの中にいる。

### 風の車が降り立った山

「初めて訪れたラヴァナゴダ村は、村人が総出で歓迎してくれました。皆さんコーヒー作ってますか？と聞いたら、一人の少女が庭先から摘んで持ってきてくれた。真っ赤に熟した上質のコーヒー豆。まさしくそれは、この国で私がす

っと探し求めていたアラビカ種だったのです」

清田さんは、この地との運命的な出会いとなった2006年11月のことをそう語る。ラヴァナゴダ村のあるコットマレー地区は、スリランカ中部の霊峰スリパターダ（アダムス・ピーク）に連なる、標高1000メートルを超える山岳地帯。古代インドの大長編叙事詩『ラーマヤナ』の中で、風の車が降り立ったとされる伝説の地であるが、険しい地形ゆえに農業普及が遅れた、貧困地帯である。

「そのとき、一人の男性が立ち上がった。村の困窮を切々と訴え始めました。なにしろコーヒーは生産者価格が安すぎて、収穫してももうけにならない、農薬も化学肥料も買うお金はない、と」

しかし清田さんにとっては渡りに船の話だった。期せずしてコーヒーの無農薬有機栽培が実践されている。そこに貧困から脱却するための手がかりがあると直感した

清田さんは、その場で良質な豆が収穫できれば全量を適正価格で買いたいという約束をした。

「村人にしてみれば、外国の商人が搾取に来たのかもしれないという不安もある。リスクはかかえますが、具体的な数字を出さないと貞剣に作るうというモチベーションがわきませんから」

有言実行。その九州人としての気質が、清田さんをまた新しい領域に踏み込ませた。

### コーヒー会社設立

「いつも直感で動く人間ですから、安心・安全な食を扱いたいという思いだけでした」

清田さんは14年前に株式会社ラヴァナゴダを設立した。大学卒業後サラリーマンを経て、理想の幼児教育を求めて幼稚園を設立したのち、殊再春製菓所専務としてみずから創業したダイレクトマーケティングによってドモホルンリンクルをトップブランドに押し上



1 人口530人のラヴァナゴダ村の風景。背後は古代インドの叙事詩『ラーマヤナ』で風の車が降り立ったとされる伝説の山。2 清田夫妻とラヴァナゴダ村の住民たち。モノの取引引き以上に人と人との交流がたいせつになる。



いかにも元気がない土地でした」  
聞けば中野農家であるイヴァンさんは、20キロほど離れたポツソフンドのために有機農法の技術指導を惜しみなく行ない、諸外国のNGO団体へフェアトレードによる支援を訴えているという。

在庫を余分にかかえる余裕のなかった清田さんは、その場では契約に至らなかったが、「コーヒーという魅惑の存在は、生産地の貧困な生活か、それとも消費地のぜいたくな時間か、いったいどちらが実像なのか」という大きな問題にぶつかった。

その答えとなるフェアトレードは、理念とビジネスの両輪がかみ合っており、初めて成立する。清田さんはその理念を追究する場が必要だと考え、帰国後すぐに日本フェアトレード委員会を設立。イヴァンさんの講演をはじめ、出版やフェスタの開催などを実施し、熊本を拠点にフェアトレードの考え方の普及に努めてきた。

困難な旅が始まった。しかし何度通ってもお目当ての樹は見つからない。そこで、アラビカ種の生育に適した高地にターゲットを絞って情報収集をしたところ、奇跡的にもスリランカ政府機関である農業省輸出局からコットマレー地区を紹介されたのである。しかし標高が高いということは、それだけ辺境の地であるということ。何時間も車に揺られてやっと訪れたその地で見えたものは、ポツソフンドなど比べものにならない劣悪な生活環境だったという。

## スリランカの コーヒーを復興

蜜蜂の名からスリパターダと名づけられた初出荷のコーヒーを口に含むと、今まで飲んだどの部類にも属さない独特の味と香りが広がる。野性味あふれる濃厚な味。ブラジル産コーヒーのあっさりとした味に慣れ親しんだ舌には少々抵抗があるかもしれないが、それも

04年、再びポツソフンドを訪れた清田さんは、そのあまりの変貌に驚いた。アメリカのフェアトレード団体と、それまでの6倍ほどの価格で契約できたのだという。組合事務所が新設され、人々に訪問者をもてなす気持の余裕が生まれていた。そしてなによりも彼らの表情が見えるほど明るくなっていたのだ。フェアトレードが始まる前とそれ以後に訪問すること、その効果をまざまざと思い知った清田さんは、次なるステップへ思いを馳せることになった。

## 幻のコーヒーを 求めて

05年8月、清田さんは、コーヒーと同様に紅茶のオガニックの世界も追究しようと思いきや、有機無農薬栽培の紅茶を探すために世界第2位の紅茶生産国であるスリランカを訪れた。旅は苦勞したが、スリランカじゅうをめぐる歩きうちにあることに気づいた。

コーヒーという奥深い世界の多様な現われの一つだ。  
「そもそも現地の人は、完熟豆ととてつない豆の区別も知らない。赤く熟れた豆だけを収穫してほしという基本的な指導から始まりました」

清田さんの行動はいつも早い。07年4月に現地事務所を開設。現地駐在ボランティアを派遣して村との親交を密にしながら、9月にはJICA（国際協力機構）草の根協力支援委託事業の認定を受けて、日本フェアトレード委員会メンバーである農業指導員の宮田喜代志さん（49歳）による本格的な地域調査を開始。今年じゅうに、豆の品質を大きく左右する共同乾燥場の設置と乾燥機や脱穀機を導入する。現在、農業省輸出局によって、当地で20万本のコーヒー樹の苗が育苗されており、各生産農家は3年後の配布を心待ちにしているという。

もともとスリランカは、住民の

「農家の庭先やジャングルの中にコーヒーが自生しているのです。聞けば現地では、コーヒーは胃の薬として飲まれていて、この先には自分が開拓すべきなにかがある」とピンとききました」  
文献を調べてみると、オランダ領時代のスリランカはコーヒーの一大産地であり、1869年にコーヒーの大敵サビ病が大発生して以来、約10年ではほぼ紅茶園に切りかわってしまったのだという。清田さんはコーヒー栽培が消滅したのは、次に統治権を握ったイギリスの政策によるものだと推測しているが、真偽はともあれその歴史をたどる探求心にも火がついた。

しかし、そのとき見た品種はインスタン用に加工されるロブスタ種ばかり。レギュラーコーヒーとして飲まれる高品質なアラビカ種でなければ、日本で販売することができない。  
こうして今度は、幻のアラビカコーヒーを探し出すという、より

自立を促す農村開発運動（サルボダヤ運動）が国じゅうに深く浸透しているお国柄。その思想の根底にあるのが仏教用語の「縁」である。熊本とブラジル、そしてスリランカ。国境を越えたその連なりの中に、「縁」の必然を感じる。地元の尊敬を集めるお坊さんが村民集会でこんな発言をしたという。「ア、この村は貧しいから子

どもが少ない。コーヒーを育てて子どもの笑顔がふれる村にしよう。同じ仏教徒である日本人の言葉を通じてみようではないか」  
一人の九州男児の大きい夢が、現実の世界を動かしつつある。今、幻のコーヒーの名に冠した蜜蜂スリパターダには、フェアトレードという日本からの新しい風が吹いている。



1 小粒でかたいスリランカの豆は、焙煎にもくふうが必要。  
2 フェアトレードコーヒーを販売する協賛中者のNPO法人「熊本すずらん会」の皆さん。このプロジェクトは、海外では生産者支援、国内では種がい者支援という側面を持つ。